



佑 啓

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学会
〒290-0265 市原市今富 1110-1
tel 0436-96-7611
<http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/>
mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

和 田 浦 の 春

里 見 吉 英

よく晴れた屋下がりだった。海からの風は冷たいものの、包み込まれるような陽光に不思議と寒さは感じない。波はごく穏やかで、きらきらと反射するしぶきのやわらかなさに時々視線をうばわれる。こんな風に砂浜を歩くのはずいぶん久しぶりだ。思えば五年前、和田町より誘致を受け、この事業に携わるようになってからもう何度この土地を訪れたことか。二桁後半、もしかしたら三桁いつているかもしれない。しかしほとんどの時間は関係者や関係機関との打ち合わせ、そして車の中で費やされていく。ふつう海水浴がお花畑をまっ先に連想すると思うが、なぜか一度も足を運んだことはなかった。ゆつたりと移ろいゆく時の流れと潮の香の漂う和田町の空気は、アルコールとタバコの煙が染みついた体をよみがえらせてくれる。とびきり新鮮で心地よい。

今春、念願かなって千葉県、房総の和田町に安房園地の障害者福祉の拠点と期待されて、第二のふる里がオープンする。緑豊かな山々と色鮮やかなお花畑、彼方には太平洋の深い藍色と、すべてが天然色に包まれている。安直な言葉ならべてみたが、要するに田舎である。でも案外この地が気に入らした自分に

少々驚く。何度か来ているうちに、それまで知りもしなかった意外な一面と遭遇したりすると、楽しくもあり愛着も湧いてくる。(年をとったことが理由かも) 建物の周囲は、まだまだ造成途中の荒涼とした土地が広がる。それは市原のときと一緒。石拾いから始め土をならし、芝生を張り、どのような環境にしていこうかといまから想いを馳せてしまう。まあ、楽しみはあとにとっておこう。

いよいよ忙しい雰囲気になってきた。あちこちから「わだ」という言葉を耳にするようにもなる。どこから聞いたのか寮生さんも盛り上がりつつある。「わだつとどこにあるんだあ」「うみで泳げるのかなあ」という旅行気分なひともいれば、誰が行くのか気になっているひともいる。「ひとり部屋ならいいきたい」と言葉のない彼も身振り手振りで伝えてくる。みんな興味津々。いらぬ不安を与えないように彼らには内緒にしていたつもりが時がたつとともにみんな知っている。動揺がはしると思いきや案外ケロッとたくましい。

職員も一緒。誰が行くのかそわそわしている。ちらちらと探りを入れながら勝手な人事をつくり同僚とともに一喜一憂。訳のわからない根拠をネタにああだこうだと執拗を振るい盛り上がっている。勝手な人事担当者を取めるには正式な発表を待つばかりに解決策はなかった。

その後はオープンに向けた具体的な話が現場でも飛び交うようになったが、時折、横道にもそれる。しまいはあらぬ方向に話題はとび、飲み会はどうするやら、バレーボールは、スキー旅行は…などなど、遊びの企画を練り上げる始末。やれやれである。

ターニングポイント。

「福祉は特定の人のためにあるのではなく、すべての人がより豊かな生活を送るために行う個人と社会の営みである」

障害を持つ人たちの補完をするのが福祉だと、手助けをするのが福祉だという発想、これは今までの福祉に対する一般的な認識である。これでは完全に強者が弱者を守る考え方に立ってしまふ。そうではなく、我々が手助けするのも社会の営みのひとつであるという認識が、いま求められているのではないだろうか。つまり対等な立場にたち物事を考えていく時代が変わっていかねばならない。障害者が手助けして欲しいときに手を差し伸べるのは、一般社会としての普通の仕組みなのだ。手助けすれば福祉が完結するといふのではなく、それは社会の営みのひとつでしかありえない。

「障害に目を向けるのではなく、全体を見る」

「福祉は一人ひとりの人生を大切にすること」

これは障害者の人生だけにについて述べているのではない。障害者も家族も、それを取り巻く社会、すべての人が同様に人生を大切にすることである。

「自立とはじぶんで主体的に生きる」と

本人が主体的にいかにか生きられるか、そこに着目することが必要である。今の風潮は地域福祉、街中で生活することだけが主体的だと錯覚を起こしている。つまり、暮らす場所と本人の主体性を結びつけた発想の仕方である。施設にいると親の意見で縛られているのであって、本人の意思に反していると単純に発想してしまいがち。閉じ込められているのだ。だから主体的に生きていかなければという論調。こうあるべきだという、べき論、画一論の怖さ。

あんな生活、こんな生活、そんな生活等々、人間である以上、障害の有無にかかわらずベストな状態の環境が整うことはありえない。大なり小なり、みんなある程度の接点で生きているのだ。権利侵害、虐待という話は論外であるが、よりベターな環境を提供することが我々の仕事であるといえよう。

施設はサービスの集合体でなければならぬ。建物をつくりそこで利用者を受け入れることが施設ではなく、あらゆるサービスをを行う機関であるべきではないか。一つひとつのサービ

スが積み重なった結果の形でなければならぬ。そこで初めて、様々な人達が主体的に生活できる状況が整う。

だから利用する側の意識も非常に大切である。そのような意識が人を呼び、輪が生まれ、空間になる。カタチをつくることならいくらでもできるが、人の心は、難しい。カッパを整えても中身がなければ意味がない。

大きな転機に差し掛かっている今、次なるストーリーを紡ぎだせるのか不安が募るばかりだが、まあ、いままで歩んできた道のりもそう大差はない。表情よく豊かに過ごす利用者、家族、そして職員的生活を夢見て、あとは力や元気で前に進むだけである。

潮風にふかれながら、紺碧の海をながめ深呼吸。バステルカラーに染まった和田浦の春は、もうすぐそこにある。



(施設長)

